鈴木 (2023). 容装心理学研究, 2(1), 14-18.

子どもの装いについての親の困り事 [1]

ー母娘に焦点をあてた検討ー

鈴木公啓 東京未来大学

Parents' distress about their children's adornment

Tomohiro SUZUKI (Tokyo Future University)

Parents have a variety of concerns regarding their children's adornment. The purpose of this study was to clarify what kind of problems mothers perceive regarding their children's adornment, and to clarify the relationship between the state of these problems and the age of girls. Data were analyzed from a total of 608 cases ranging from preschoolers to junior high school students. The most frequent problem was "wanting to wear the same clothes all the time," followed by "complaining about or not wearing the clothes chosen by the parents." After categorizing the problems, an examination of the relationship revealed a unique pattern depending on the age. It was revealed that not only changes in the environment accompanying the growth of girls, but also factors such as the way parents perceive their daughters as they mature are related to the emergence of the problem.

Keywords: adornment, dress up, children, development, problem

子どもの装いに対し，親は様々な種類の悩みや困ったこと（以降，困り事）を有する場合がある。従来は，子どもの装いについては，華美な装いであるおしゃれに焦点があてられがちであり（e.g., 石田，2006 ; 鈴木，2018），メディアでもそのような観点で取り上げられることがあった（e.g., NHK「ウワサの保護者会」制作班, 2017）。しかし，未就学児から中学生の娘がいる母親を対象とした自由記述の調査により，必ずしも子どもの装いの困り事は，メディアで言及されるようなおしゃれによるものに限らないことが示されている（鈴木，2022）。華美な装いの困り事の割合は決して大きくなく（33.3%），むしろ，特定の衣服へのこだわりといった困り事の割合が大きい（43.3%）ことが示されている。そして，無頓着であるといった困り事が，ある程度の割合で存在している（16.7%）。

しかし，その調査（鈴木，2022）にはいくつかの問題があると考えられる。一つは，質的調査ということもあり，対象としているサンプルサイズが小さく（*n*=30），普遍性に限界がある点である。一つは，困りごとの自由記述の分類がおこなわれ，内容が 3 つに分類されたうえで出現頻度が検討されているが，その分類の客観性が不十分な点である。

子どもの装いの問題について扱っていくうえで，その実体をより明確にそして客観的に把握しておくことは有用といえる。特に，親や社会との関わりを考慮した上で介入などの対応を考えていく場合は，必須といえよう。そこで本研究では，子どもの装いに関してどのような問題がどの程度実際に生じているのか，比較的多くの人を対象とした量的調査により明らかにすることを目的とする。その際, 鈴木（2022）で扱われた困り事の内容の 3 つの分類が適切であったかについても確認する。また，学年との関連性を検討することにより，それぞれの困り事の性質について子の年齢の観点から考察をおこなうこととする。なお，今回は母親による娘に対する困り事の認識という枠組みでの検討とする。

1 Corresponding author: Tomohiro SUZUKI (E-mail: suzukirt_[at]nifty.com)

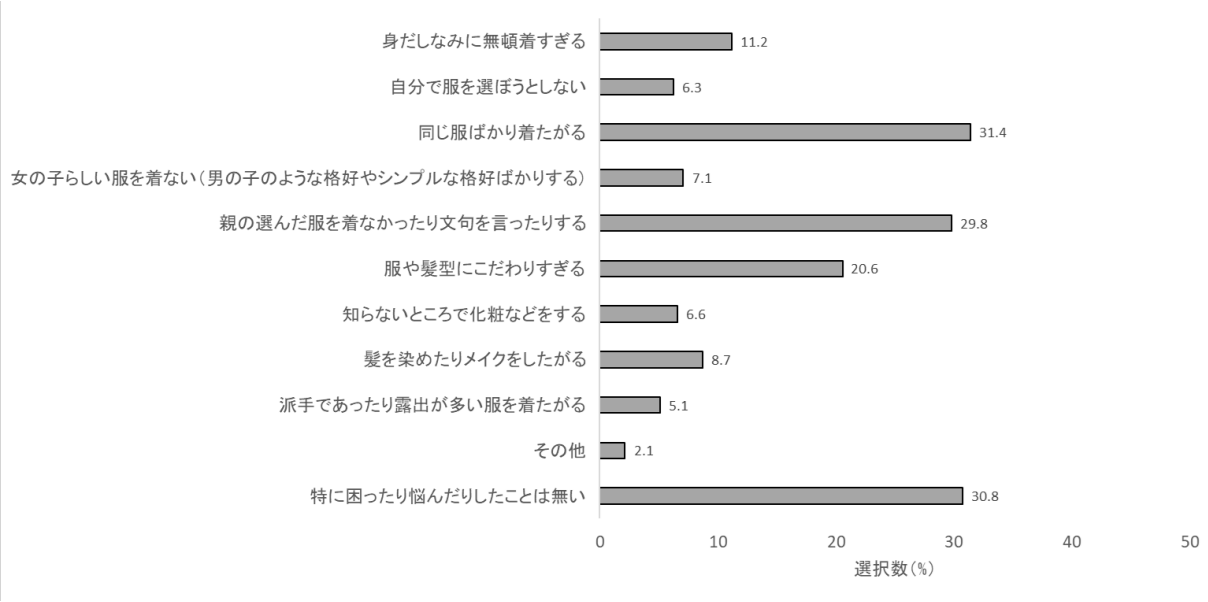

Figure 1　子どもの装いの困り事の選択数

方　法

対象および実施方法

未就学児（3 歳以上）から中学生の娘がいる成人女性 501 名（平均年齢 37.6 歳，標準偏差 6.87，*Min*.=22，*Max*.=55）から回答を得た。2021 年 7 月に web 調査会社(アイブリッジ株式会社)を介して web 調査を実施した。登録モニターに対して依頼が配信され，回答に同意した者が調査への回答を web 上でおこなった。なお，事前にスクリーニング調査（*n*=2000）をおこない，未就学児から中学生の娘がいる者を抽出し（*n*=822），それらの該当者に対して本調査を実施した。なお，娘のみがいる場合もあれば，娘と息子がいる場合もある。本調査において，このスクリーニング調査の内容と齟齬がある回答を削除したうえで，以降の分析に使用した。回答者には換金可能なポイントが謝礼として付与された。なお，本研究は著者の所属する大学の研究倫理不正防止委員会にて承認を得ている。

調査内容

娘の装いの困り事について，9 つの選択肢および「その他」の選択肢から，あてはまるものを全て選択するように求めた。9 つの選択肢の内容は，鈴木（2022）などを参考に作成した（項目は Figure 1 を参照のこと）。なお，「特に困ったり悩んだりしたことは無い」という選択肢も設定し，該当する場合はそれを選択するように求めた。娘が複数いる場合は，それぞれの娘について回答を求めた。

結　果

姉妹数は，一人っ子が 320 ケース，二人姉妹が 115 ケース，三人姉妹が 30 ケース，四人姉妹が 1 ケースであった。姉妹が二人以上の場合で以降に述べる学年に該当する姉妹については，それぞれについての回答を求めた。つまり，二人姉妹で姉が中学生で妹が小学生の場合は，それぞれについて回答を求めることになり，2 ケースということになる。なお，ケースの内訳は，長女が 458 名，次女が 127 名，三女が 22 名，四女が 1 名であった。以降の分析は，親ではなく娘をケースとして延べで 608 ケースのデータとして分析をおこなっていく。娘の学年について整理したところ（以下，年齢区分），未就学児（3 歳以上）が 232 名，小学生低学年が 115 名，小学生中学年が 74 名，小学生高学年が 75 名，中学生が 112 名であった。

困り事の選択割合を Figure 1 に示す。「特に困ったり悩んだりしたことは無い」を選択した者は 187 名（30.8%）であり，それ以外の者はいずれかの困り事を選択していた。そして，最も多いのは「同じ服ばかり着たがる」（31.4%）であり，次が「親の選んだ服を着なかったり文句を言ったりする」（29.8%）であった。

ここで，困り事の分類をおこなった。類似

した困り事をまとめるために，クラスター分析（ウオード法，ユークリッド距離）をおこなった。なお，選択は 1，非選択は 0 とした。分析の結果，困り事には 3 つのクラスターが確認された（Table 1）。内容から，CL1 は「無頓着」，CL2 は，「華美」CL3 は「こだわり」とした。そして，含まれる項目の平均値を各クラスターの得点とした。

学年区分により困り事のクラスターの得点が異なるか検討した。年齢区分毎の得点を Figure 2 から 4 に示す[2)]。無頓着は，小学生高学年になるほど得点が高値になっていたが，中学生は小学生高学年よりも低値であった。華美は，小学生低学年が最も高く，それ以降は次第に低値になっていた。こだわりは，中学生が他に比べ低値になっていた。

考　察

本研究は，子どもの装いに関してどのような問題が実際に生じているのかについて明らかにすることを目的とした。また，年齢区分との関連も検討した。

約 7 割のケースにおいて，少なくとも何かしらの困り事を有していた。そして，最も多い困り事は，「同じ服ばかり着たがる」，次が「親の選んだ服を着なかったり文句を言ったりする」であった。鈴木（2022）と同様に，親が悩んだり困ったりしている主要なものは華美ではないこと，むしろこだわりといったものであることが再確認されたといえる。

クラスター分析によりそれらの困り事の経験を分類したところ，「無頓着」，「華美」，「こだわり」の 3 つのクラスターが得られた。このことから，困り事は 3 つに分類可能であることが示されたといえる。なお，この分類結果は，鈴木（2022）と同様であった。今回の調査において扱った個々の困り事の内容は，鈴木（2022）の結果をもとにしているが，その研究における 3 つの分類とそこに含まれる内容が今回の調査でも確認された。このことから，先行研究の分類が妥当であることも示されたといえる。

困り事と年齢区分との関連を検討したところ，それぞれの困り事に独自のパターンが確認された。まず，無頓着は，小学生高学年になる

Table 1　困り事の分類結果

Cl1	身だしなみに無頓着すぎる
	自分で服を選ぼうとしない
	女の子らしい服を着ない
	（男の子のような格好やシンプルな格好ばかりする）
Cl2	知らないところで化粧などをする
	髪を染めたりメイクをしたがる
	派手であったり露出が多い服を着たがる
Cl3	同じ服ばかり着たがる
	親の選んだ服を着なかったり文句を言ったりする
	服や髪型にこだわりすぎる

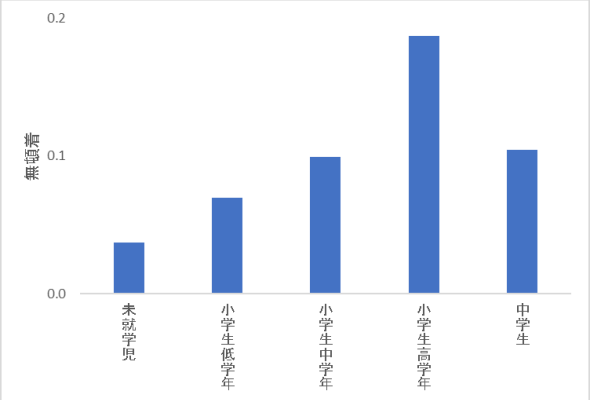

Figure 2　年齢区分毎の「無頓着」得点

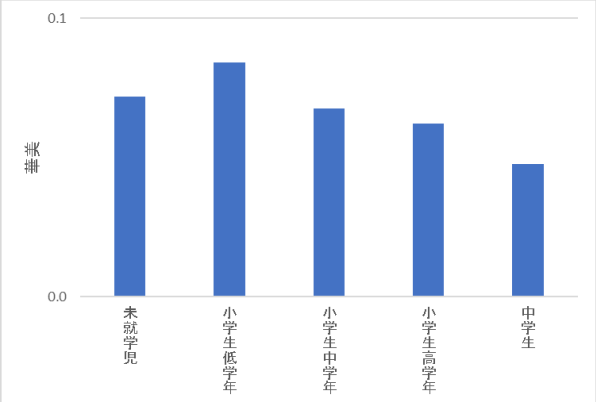

Figure 3　年齢区分毎の「華美」得点

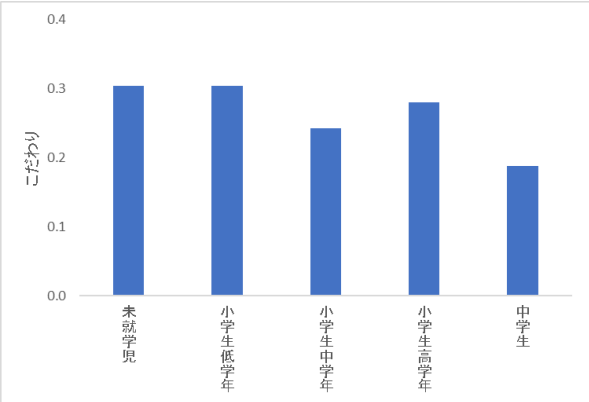

Figure 4　年齢区分毎の「こだわり」得点

に従い得点が高くなっていたが，中学生の時点では小学生高学年よりも低値であった。このことから，子どもが未就学児であったりする時には，装いに関心を持たないでいることに特に悩んではいなかったものの，成長するにしたがって装いに関心を持たないという状態に心配になってきたことが推察される。そして，中学生になると，環境が変わることによって娘においておしゃれに興味を持つといったことも生じ，母親は当初の心配が減っているということが生じていることが考えられる。

華美については，小学生になった時期に得点が高くなっていた。これは，小学校に入学し環境が変わり，友人づきあいも変わったことが関係していると考えられる。子どものおしゃれには友人の影響が大きいことが示唆されているが（e.g., 鈴木, 2020），小学校で出会った友人からの影響を受けることによって，おしゃれに興味や関心を有し，そして，実際に華美なおしゃれをするようになるケースがあることが想定される。また，親が環境変化における子どもの様子への注視の中で，おしゃれへも意識が向けられ，困り事と認識されやすくなっているということも考えられる。ところで，小学生低学年以降は，次第に得点が小さくなっている。子どもが，おしゃれに興味や関心を持たなくなってきたものとは考えにくい。これは，子どもの年齢が上がるにしたがい，親が許容するようになり，悩みとはならなくなった可能性が考えられる。もしくは，諦めるようになったということも考えられる。

こだわりについては，中学生において得点が小さくなっていた。つまり，中学生になるとこだわりが減少している可能性，もしくは，親が諦めるなどして悩まなくなった可能性などが考えられる。先ほどの華美についても言えることであるが，子どもの側の変化だけでなく，子の成長に伴う親の受け止め方に起因して悩みなどが生じていることも示唆される。

本研究により，子どもの装いについて親がどのようことに困っているのか，年齢との関連も含めて明らかにすることができた。母親が必ずしも華美なおしゃれに困っているわけではないことが再確認された。そして，受け止める側の要因もあることが示唆された。それぞれの困り事についてどのような関わり方が可能であり，そして適切であるかは，今後さらに検討が重ねられる必要があろう。その際には，子どもの年齢による状況も考慮していく必要があると考えられる。

注

2　回答者である母親が複数の娘について回答している場合があるため, すべての娘の回答が対応無しデータというわけではない。そのため, 統計的仮説検定はおこなうことができない。したがって，記述統計量そのものから解釈をおこなうこととした。なお，Figure 2 から Figure 4 については，出現頻度が内容によって異なるために, 縦軸の範囲はそれぞれ異なっている。

利益相反

本論文に関して開示すべき利益相反事項は無い。

引用文献

石田かおり (2006). 児童・生徒の化粧実態とその問題点―化粧教育提案のための実態分析―　駒澤女子大学研究紀要, *13*, 27-41.

NHK「ウワサの保護者会」制作班 (2017). ウワサの保護者会 "私の子育て大丈夫?"と思った時に読む本 マガジンハウス

鈴木公啓 (2018). 子どものおしゃれの低年齢化 ― 未就学児から高校生におけるおしゃれの実態―　慶應義塾大学日吉紀要　言語・文化・コミュニケーション, *50*, 53-69.

鈴木公啓 (2020). 装いの低年齢化　鈴木公啓 (編) 装いの心理学－整え飾るこころと行動－　(pp.209-220)　北大路書房

鈴木公啓 (2022). 子どもの装いについての親の悩み―内容と対応と現状についての質的調査とインタビューからみえてくるもの―　未来の保育と教育, *9*, 59-68.

親は子どもの装いについて様々な悩み事や困り事を有する。本研究では，娘の装いに関して母親はどのような困り事を認識しているのか，その実体を明らかにするとともに，娘の年齢との関連について明らかにすることを目的とした。未就学児から中学生にかけての 608 ケースについてデータを分析したところ，最も多い困り事は「同じ服ばかり着たがる」であり，次が「親の選んだ服を着なかったり文句を言ったりする」であった。また，困り事の分類の後に年齢との関連を検討したところ，困り事によって独自のパターンが確認された。そして，娘の成長に伴う環境の変化だけでなく，娘の成長に伴う親の受け止め方の変化といった要因が関連している可能性が示唆された。

キーワード： 装い, おしゃれ, 子ども, 発達, 問題

— 2022. 7. 28 受稿，2022. 10. 5 受理 —